

田 村 遺 跡 X

- 第 12 次 調 査 報 告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第385集



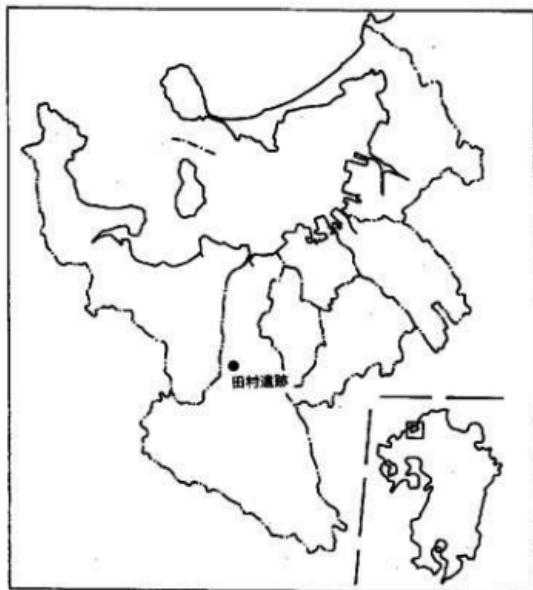
1994

福岡市教育委員会

TA MURA
田 村 遺 跡 X

- 第 12 次 調 査 報 告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第385集



遺跡略号 TMR-12
遺跡調査番号 9242

1994

福岡市教育委員会

序 文

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、子孫に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市像」を目指の一つとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発事業によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であります。このため市教育委員会では事前に発掘調査を行い、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

今回報告する田村遺跡においても学校、隣地等の建設に伴い発掘調査を実施してきました。本書は自転車歩行者道の建設に先立ち行った調査の成果をまとめたものです。この度の調査では、中世を中心とする集落の一様相が明らかにされ、貴重な資料を得ることができました。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、御理解と御協力を賜りました多くの方々に対し、心から謝意を表します。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　　言

1. 本書は福岡市土木局道路建設第2課による主要地方道大野城二丈線自転車歩行者道建設に伴い、福岡市教育委員会が1992年10月から12月にかけて発掘調査を実施した田村遺跡第12次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣・辻節子による。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は榎本・黒田和生・英豪之による。
4. 本書に掲載した遺構及び遺物写真的撮影は榎本による。
5. 本書に掲載した挿図の製図は榎本・黒田による。
6. 本書に使用した方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
7. 遺構の呼称は土坑をS K、溝をS D、井戸をS Eと略号化した。
8. 本書に係わる図面、写真、遺物等の一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
9. 本書の執筆及び編集は榎本が行った。

遺跡名	田村遺跡（第12次調査）	遺跡略号	T M R - 12	調査番号	9242
調査地地籍	福岡市早良区大字田778-1他	分布地図番号	93-A-21		
開発面積	1,431.3m ²	調査対象面積	750m ²	調査面積	512.2m ²

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 遺跡の環境と概要	2
1. 立地と歴史的環境	2
2. 田村遺跡の概要	4
III. 調査の記録	6
1. 調査経過と概要	6
1) 調査経過	6
2) 調査概要	6
2. A-1区の調査	7
1) 概要	7
2) 造構と遺物	7
(1) 土坑	7
3. A-2区の調査	8
1) 概要	8
2) 造構と遺物	8
(1) 土坑	8
(2) 溝	11
(3) 井戸	11
4. B区・C区・D区の調査	12
1) 概要	12
2) 造構と遺物	12
(1) 上坑	12
(2) 溝	13
5. E区の調査	21
1) 概要	21
2) 造構と遺物	21
(1) 土坑	21
(2) 溝	22
6. F-1区の調査	23

1) 概 要	23
2) 造構と遺物	23
(1) 土 坑	23
(2) 溝	23
7. F - 2 区の調査	24
1) 概 要	24
2) 造構と遺物	24
(1) 土 坑	24
(2) 溝	24
IV. 結 語	26

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
第2図 田村遺跡調査区位置図 (1/8,000)	4
第3図 出村遺跡第12次調査区位置図 (1/1,500)	6
第4図 A-1区遺構配置図 (1/100)	7
第5図 A-1区土坑尖削図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	8
第6図 A-2区遺構配置図 (1/200)	9
第7図 A-2区土坑尖削図 (1/40、1/60)	10
第8図 A-2区土坑・溝出土遺物実測図 (1/2、1/3)	11
第9図 S E003実測図 (1/40)	11
第10図 B区・C区・D区遺構配置図 (1/200)	12
第11図 B区土坑実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	13
第12図 S D101土層断面尖削図 (1/40)	14
第13図 S D101出土遺物実測図 1 (1/3)	15
第14図 S D101出土遺物尖削図 2 (1/3)	16
第15図 S D101出土遺物実測図 3 (1/3)	17
第16図 S D101出土遺物実測図 4 (1/3)	18
第17図 S D101出土遺物実測図 5 (1/3)	19
第18図 S D101出土遺物実測図 6 (1/3、1/4)	20
第19図 E区遺構配置図 (1/200)	21
第20図 E区土坑実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	22
第21図 S D302土層断面図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)	22
第22図 F-1区遺構配置図 (1/200)	23
第23図 F-1区土坑・溝土層断面実測図 (1/40)	24
第24図 F-2区遺構配置図 (1/200)	24
第25図 F-2区土坑・溝土層断面実測図 (1/40)	25
第26図 田村遺跡第12次調査周辺溝配置図 (1/600)	26

表 目 次

第1表 山村遺跡調査一覧表	5
---------------------	---

図版目次

- 図版1 田村遺跡周辺航空写真
- 図版2 (1) A-1区全景(東から)
(2) A-2区全景(西から)
- 図版3 (1) A-2区SK001(東から)
(2) A-2区SK002(北から)
(3) A-2区SD061(南から)
(4) A-2区SE003(北東から)
- 図版4 (1) B区全景(東から)
(2) B区SD101土層(西から)
(3) B区SD101遺物出土状況(東から)
- 図版5 (1) D区SD101(西から)
(2) C区SD101上層(東から)
(3) D区東壁土層(西から)
- 図版6 (1) E区全景(東から)
(2) E区SK301(北から)
(3) E区SD302(北東から)
- 図版7 (1) F-1・F-2区全景(東から)
(2) F-1区SK351(西から)
(3) F-1区SK353土層(北から)
- 図版8 (1) F-2区SK401(北から)
(2) F-2区SD403(南から)
(3) 調査区周辺風景
- 図版9 出土遺物I
- 図版10 出土遺物II

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1992年（平成4年）1月、福岡市土木局から教育委員会埋蔵文化財課に、福岡市早良区大字田における特定交通安全施設等整備事業（主要地方道大野城二丈線自転車歩行者道建設）に伴う埋蔵文化財の有無についての確認依頼が申請された。埋蔵文化財課では該地が周知の田村遺跡に含まれていることと、該地の隣接地で過去に数次にわたる発掘調査を実施し、中世を中心とする遺構・遺物確認されていることから土木局と協議をもち、1992年10月から発掘調査を行うこととなった。

2. 調査組織

調査委託：福岡市土木局道路建設第2課

調査主体：福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 折尾学

埋蔵文化財課第1係長 飛高憲雄（前任） 横山邦雄

調査庶務：埋蔵文化財課第1係 寺崎幸男

事前審査：埋蔵文化財課主任文化財主事 井澤洋一

埋蔵文化財課 吉武学（前任）長家伸

調査担当：埋蔵文化財課第1係 橋本義嗣

調査作業：金子啓祐 井上トミコ 井上ヒテコ 井上麻智子 金子ヨシ子 菊地栄子

清木シズエ 正崎由須子 辻節子 林嘉子 平野ミサオ 森山宣子

結城千代子 和山裕見了

整理作業：有馬千恵美 西島信枝 原田真美 松尾幸子 松尾真澄

この他にも地元の方々をはじめとして数多くの人々の御理解と御協力によって発掘調査ならびに資料整理が支障なく行われ、また多くの御指導と御助言を得た。

II. 遺跡の環境と概要

1. 立地と歴史的環境

玄海灘に北面し、背後に脊振・三郡山系をひかえる福岡市には西から今宿、早良、福岡、柏屋の中小平野が展開する。これらの各平野は山系より派生する丘陵、山塊によって画され、古くから地理的、歴史的に独自の環境を有している。

今回報告する田村遺跡の位置する早良平野は西側を脊振山系から北に派生する飯盛、長垂山塊に、また東側を油山山塊に区切られ、平野の中央には室見川が博多湾へと北流する。平野には河口部を中心に洪積台地が点在し、北辺部には砂丘が形成されるが、その大部分は室見川を中心として金屑川、十郎川などの中小河川による沖積作用によって形成される。

田村遺跡は平野中央南側の沖積地上に立地し、室見川中流の東岸400mに位置する。

平野南部の周辺遺跡を観察すると、縄文時代では田村遺跡の南側に位置する四箇遺跡で後・晩期を中心とする多量の土器・石器又、植物遺体が確認されている。また、その南東の重留遺跡では晩期の堅穴住居、墓地等から構成される集落が検出され、該期の好資料を提供した。

縄文時代末から弥生時代前期には平野の中央部以南すでに生活の痕跡が認められ、重留遺跡、岩本遺跡、東入部遺跡では堅穴住居、貯蔵穴、壙棺墓等が確認されている。室見川を挟み本遺跡と対峙して扇状地に広がる吉武遺跡群には前期から中期を中心として大型掘立柱建物や青銅器等の副葬品を有する壙棺墓群が検出され、該期の当平野における首長層の消長を考える上で極めて貴重である。また、東入部遺跡においても吉武遺跡群に並行する時期の同様の遺構が認められるが、その内容には格差があり社会構造を考察する上でも興味深い。沖積地においては四箇遺跡、鶴町遺跡等で水利施設が確認されており、中期から後期にかけて沖積高地に生活基盤を求めた様相が窺い知れる。

古墳時代の墳墓ではクエゾノ古墳、樋渡古墳、拝塚古墳、梅林古墳等の首長墓が4世紀末～6世紀中葉にかけて築造され、後期になると平野周縁の山麓部には多数の群集墳が営まれる。集落は弥生時代の後期に一部断絶があるが、前代を踏襲し、古武遺跡群、岩本遺跡、東入部遺跡等でその形成が認められる。

古代の様相は不明な点が多いが、東入部遺跡で検出された大型建物は官衙的な色彩が濃く、また周辺では最近、製鉄関連の遺構が比較的まとまって確認されていることも含め、今後の調査成果によって具体化された歴史像が明らかにされよう。

古代末～中世にかけては沖積地での生活が定着し、企画的で大規模な水利施設が各所で認められる。清末遺跡では大型建物や居館が造営され、田村遺跡と同様に沖積地内での水田開発を担った拠点的集落であったと考えられる。



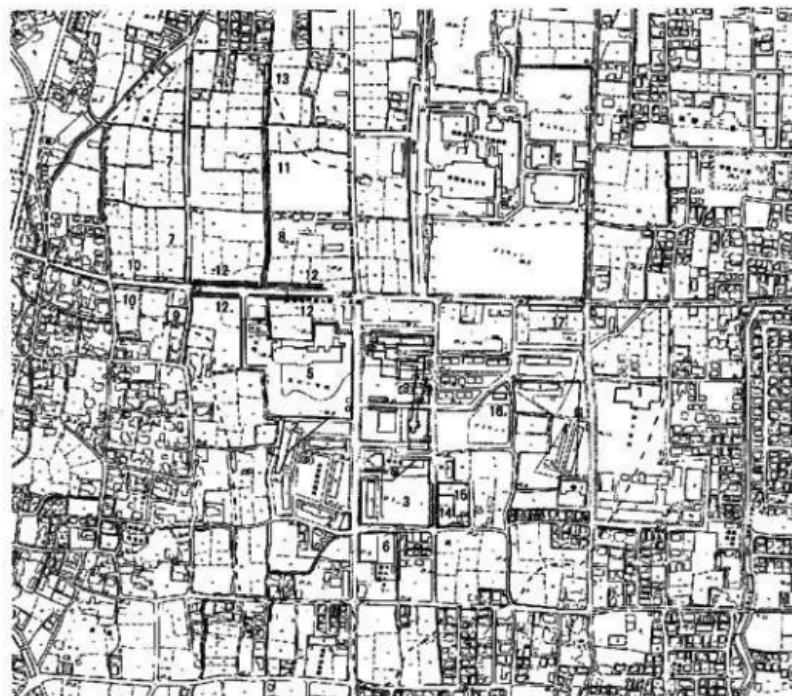
第1図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

2. 田村遺跡の概要

田村遺跡は沖積地上に展開する東西約760m、南北約850mの遺跡群で、学校・団地・道路建設等に伴い、これまでに16次の調査が行われてきた。その結果、縄文時代時代から近世に至る多数の遺構及び遺物が確認され、遺跡の様相が明確になりつつある。

その概要は第1表にまとめたが、中心となる時期は弥生時代及び中世で、前者では前期の段階にはすでに第5次調査で検出された墓地等から生活の痕跡が看取される。中期以降には第2・3次で確認された水利施設や第3・17次調査の堅穴住居から推察すると、沖積地における水田開発が該期に本格的に開始され、遺跡東側の微高地に集落が営まれたものと考えられる。

平安時代の後半以降には多数の掘立柱建物群が2～5次・14・15次調査で検出されており、該期の平野内における最大規模の集落の出現を見ることができる。特に、第5次調査で確認された集落は継続的かつ拠点的なもので、建物規模や出土遺物の質量が他を凌駕する。また、本



第2図 田村遺跡調査区位図(1/8000)

遺跡も含め周辺地域には整然とした条里地割が既存の道路・水路・水田畦畔に良好に遺存しており、その地割に重複する南北方向の溝が第5・7・8・11・13次調査で検出されている。今回報告する第12次調査では、本調査以前には断片的にしか確認されていなかった東西方向の溝を比較的良好に検出することができた。

調査次数	調査年度	調査概要	調査報告書
第1次	1978	古墳時代前期の土坑、平安時代の土坑等	市報第70集
第2次	1980、1981	弥生時代中期の河川・井堰、古代～中世の柵・掘立柱建物・堅穴住居・土塙墓等	市報第89集 市報第101集
第3次	1981、1982	弥生時代の堅穴住居・河川・杭列、中世の掘立柱建物・井戸等	市報第167集
第4次	1982、1983	平安時代の掘立柱建物・土坑・井戸等	市報第216集
第5次	1984、1985	縄文時代後・晩期土坑、弥生時代前期の槨棺墓、中世の掘立柱建物・土坑・井戸・溝等	市報第192集 市報第200集
第6次	1984	縄文時代後・晩期のピット等	未報告
第7次	1984	古墳時代の堅穴住居・槨棺墓、中世の溝等	市報第168集
第8次	1988	中世の溝等	市報第384集
第9次	1989	中世の溝・土坑・柱穴等	市報第302集
第10次	1989	中世の溝・柱穴等	未報告
第11次	1990	中世の溝等	市報第384集
第12次	1992	中世の溝・土坑・井戸等	未報告
第13次	1992	平安時代土坑、中世溝等	市報第384集
第14次	1992	平安時代掘立柱建物等	未報告
第15次	1993	平安時代掘立柱建物等	未報告
第16次	1993	旧河川等	未報告
第17次	1993	弥生中期前半～後半堅穴住居・溝等	未報告

第1表 田村遺跡調査一覧表

III. 調査の記録

1. 調査経過と概要

1) 調査経過

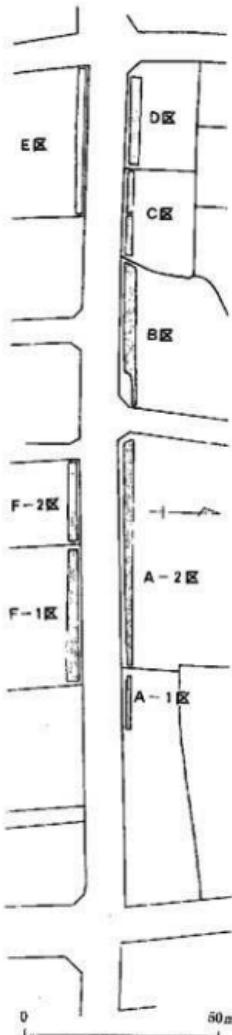
既設道路に添った狭長な調査域のため、排土置場確保の目的で、隣接する休耕田を借地し、調査を開始した。申請地は耕作地の境界部分にブロック塀や昇降用のスロープが設けられており、第3図に示すように細かく分断された調査区を設定せざるを得なかった。1992年10月26日から重機を投入し、表剥ぎの終了した調査区より順次調査に着手した。北側調査区（A区～D区）の調査を先行させ、後に南側調査区（E区～F区）の調査を実施した。安全上、調査の完了した調査区より重機による埋め戻しを行い、12月14日を以て全作業を終了した。

2) 調査概要

本調査地は田村遺跡の西側に位置し、現況は水田であった。調査面積は512.2m²。基本層序は上層より水田耕作上、床土、灰褐色のブロックを含む黄褐色粘質土と続き、30～40cmで遺構面である淡黄褐色土に達する。遺構面の標高は14.6m前後を測り、北側に緩く傾斜する。

検出遺構は土坑、溝、井戸、柱穴等で、大半が中世に属する。本調査地の南40mでは小学校の建設に伴い第5次調査が実施され、11世紀～14世紀の大規模な集落が確認されている。その延長も予想されたが、同調査に比すると遺構の密度は薄い。B区～D区で検出した溝は、同調査等で確認されている南北方向の大溝に直交するものと考えられる。また、検出した柱穴は据立柱建物を構成するものと考えられるが、その規模、内容を確認するには至らなかった。

上述したように調査に際しては便宜上、分断された箇所毎に調査区名（△区～F区、一部枝番有り）を付した。遺構番号は3桁の通し番号とし、番号の重複はない（ただし、欠番有り）。今回の報告にあたっても基本的に調査時の調査区名、遺構番号を用いた。また、遺構に関してはその性格を吟味した上で、例言に記した遺構略号を遺構番号の前に付した。ただ、調査区の幅が1～3mと狭く、各遺構の全容が判明したものは少ないため、土坑・溝等の区別を便宜的に行った遺構もある。以下、調査区毎に検出遺構と出土遺物の報告を行うが、関連性の看取される調査区に関しては取りまとめて記述する。



第3図 田村遺跡第
12次調査区位置図
(1/1,500)

2. A-1区の調査

1) 概要

A-1区は今回調査地の北東端に位置し、14.5m²を調査した。調査区の南壁沿いには既存のコンクリート塀の掘り方が認められ、遺構の全容の判明するものは希少である。検出した遺構は土坑、小規模な溝、ピットである。ここでは比較的内容の窺い知れる土坑を報告する。遺構面の標高は14.6mを測る。

2) 遺構と遺物

(1) 土坑

S K253(第5図) 調査区の西に位置する溝状の上坑である。北側は調査区外に延びる。幅0.55m、深さ0.1mを測る。覆土は暗茶褐色土である。

出土遺物(第5図1) 土師器塊である。復元底径7.0cmを測る。極低い高台部を有し、内湾気味に立ち上がる。内外面ともに磨滅しており、調整は不明。床面上で出土した。他に遺物には土師器の細片が1点ある。

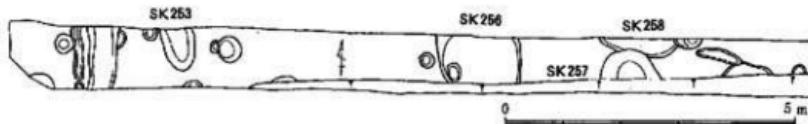
S K256(第5図) 調査区の略中央に位置する。北側は調査区外に延び、南側は攪乱に切られる。幅1.4m、深さ0.4mを測り、断面は逆梯形を呈する。溝の可能性もある。土師器、瓦器、磁器の細片が出土した。

S K257(第5図) 調査区の東に位置する。北側でS K258を切り、両側は攪乱に切られる。幅1.0m、深さ0.1mを測る。覆土は暗茶褐色を呈する。

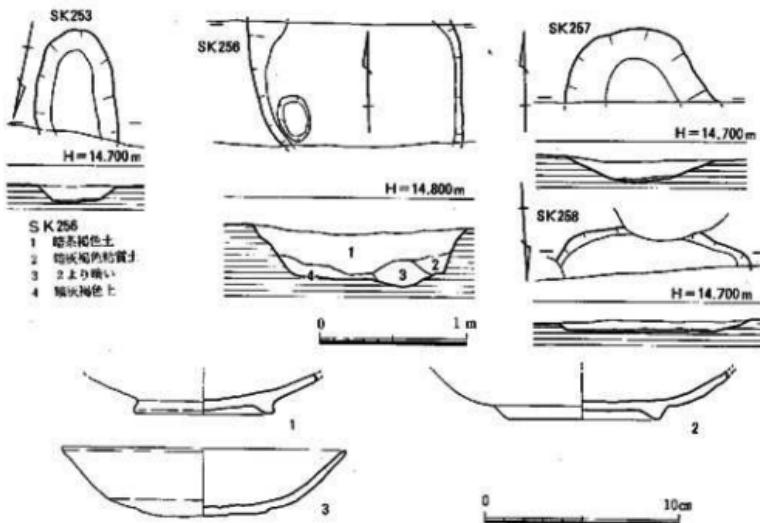
出土遺物(第5図2) 瓦器塊で、復元底径7.8センチメートルを測る。断面が三角形に近い低い高台部を有する。磨滅が著しい。内外面ともに黒灰色を呈す。他に土師器、瓦器の細片が出土した。

S K258(第5図) 大半が調査区外に位置し、S K257に切られる。現存で幅1.3m、深さ0.1mを測る。覆土は赤味がかった茶褐色土である。

出土遺物(第5図3) 土師器の丸底壺である。復元口径14.4cm、器高3.5cmを測る。外底部はへラ切りで、未調整である。一部磨滅するが、体部外面及び口縁部内面はヨコナデを施す。他にも土師器の細片が少數出土している。



第4図 A-1区遺構配位置図 (1/100)



第5図 A-1区土坑測図(1/40) 及び出土遺物実測図(1/3)

3. A-2区の調査

1) 概要

A-2区はA-1区の西側に位置し、調査面積は123.2m²である。調査区の中央から西側にかけてピットが検出されたが、掘立柱建物としてのまとまりを把握するに至っていない。5次調査の成果から南北棟の建物の存在が予測されたが、本調査区が東西方向に狭長なために十分な確認が行えなかった。他の遺構としては土坑、井戸、溝があるが、調査区の西端で比較的大型の土坑を検出したほかは小規模なものが殆どである。遺構面の標高は14.5mを測る。

2) 遺構と遺物

(1) 土坑

SK001(第7図) 調査区の西端に位置する隅丸方形の竪穴状土坑である。南西隅をSK002に切られ、北側は調査区外に延びる。幅3.2m、深さ0.1mを測る。床面は略平坦で、ピットの掘り込みは認められなかった。覆土は暗茶褐色土で炭化物片少量含む。

出土遺物(第8図4~8) 4・5は上師器環である。順に復元口径13.4、13.2cm、器高3.5、2.7cmを測る。共に回転糸切り底で、板状圧痕を有し、黄灰褐色を呈する。胎土には金雲母片を多量に含む。6・7は土師器小皿である。6は完形品で口径8.8cm、器高1.4cmを測る。回転糸切り底で、板状圧痕は無い。器面に凹凸が見られ、やや粗雑な造りである。7は復元口径



第6図 A-2区遺構配置図 (1/200)

8.6cmを測る。回転糸切り底であるが、磨滅により板状圧痕の有無は確認できない。共に黄橙色で、胎土には金雲母片を多量に含む。8は白磁碗の底部片で復元底径5.8cmを測る。直立した高台部を有し、接付き部は平坦である。やや灰味がかった白色の釉が一部高台部脇まで施される。他に土師器、青磁の細片が出土した。

S K 002 (第7図) 調査区の南西端に位置する。S K 001を切り、南側は調査区外に延びる。幅1.4m、深さ0.55mを測り、西側に平坦面を有する。

出土遺物 (第8図9・10) 9は土師器小皿で、復元口径8.8cm、器高1.3cmを測る。回転糸切り底で、板状圧痕は認められない。器壁は全体的に厚手である。覆土中位で出土した。10は銅製の小型の仏像である。袈裟を纏い、胸前で合掌する。頭部の上端、片腕及び脚部下端を欠失する。下端には芯棒が認められる。残存高は3.2cmを測る。他に土師器、青磁の細片が出土した。

S K 004 (第7図) 調査区の東端に位置し、南側は調査区外に延びる。幅1.3、深さ0.25mを測り、北側の床面には深さ0.1mのピット状の掘り込みを有する。覆土は暗茶褐色土である。

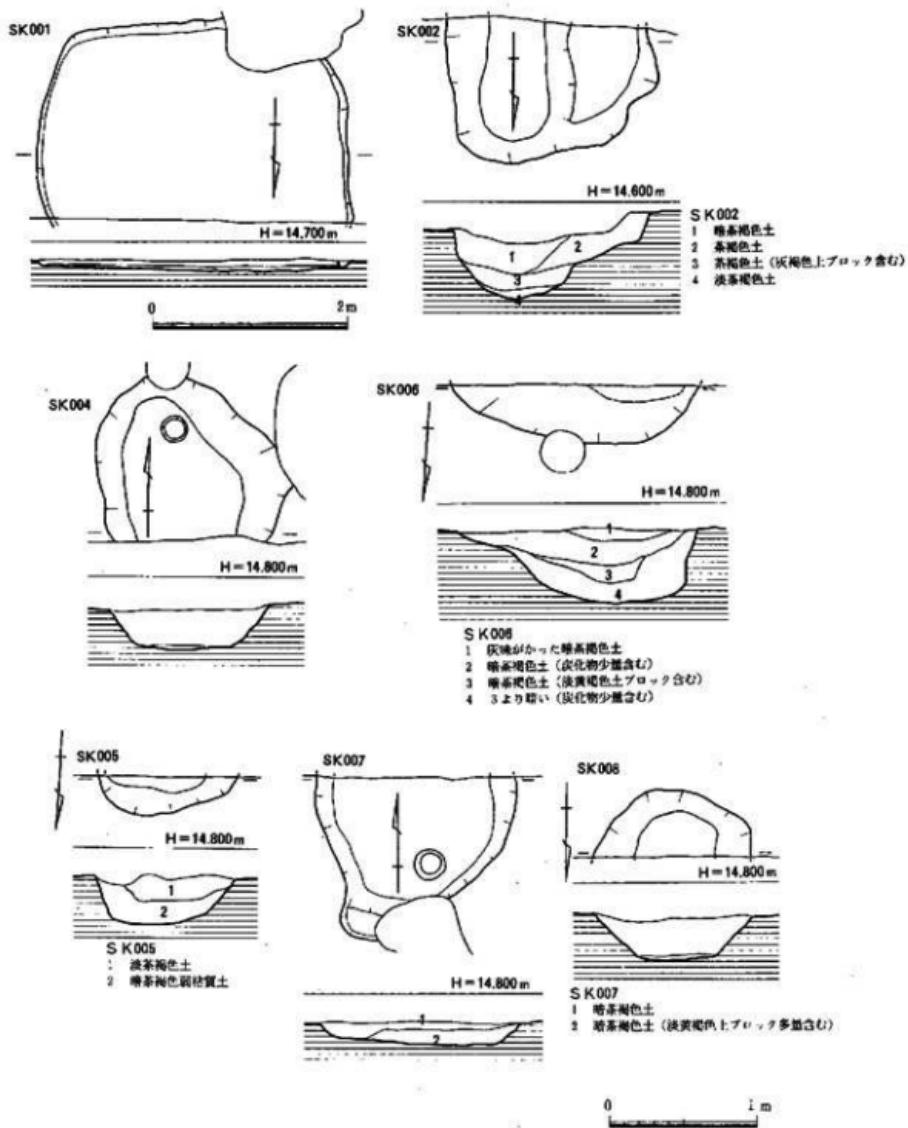
出土遺物 (第8図11) 土師器の丸底盤で、復元口径15.4cm、器高3.8cmを測る。口縁部は緩く外反する。ヘラ切り底を有し、ナデを施す。淡黄橙色を呈する。他に土師器、須恵器の細片が出土した。

S K 005 (第7図) 調査区の中央に位置し、その大半は調査区外に延びる。幅0.95m、深さ0.35mを測る。土師器、陶器の細片が少量出土した。

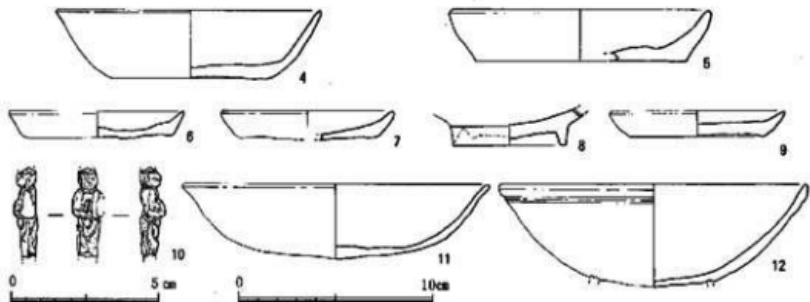
S K 006 (第7図) 調査区の中央東寄りに位置し、南側は調査区外に延びる。幅1.65m、深さ0.5mを測る。糸切り底の土師器、瓦器、白磁の細片が出土した。

S K 007 (第7図) 調査区西側で検出した。南側を土坑に切られ、北側は調査区外に位置する。幅1.2m、深さ0.15mを測り、床面には深さ0.1mのピットが認められた。南側が小さく突出し、平坦面を有する。出土遺物には土師器、須恵器が少量ある。

S K 008 (第7図) S K 007の東に位置し、北側は調査区外に延びる。幅1.1m、深さ0.25mを測り、断面は逆梯形を呈する。覆土は暗茶褐色土で、炭化物を微量含む。



第7図 A-2区土坑実測図 (SK001は1/60、他は1/40)



第8図 A-2区土坑・溝出土遺物実測図 (10は1/2、他は1/3)

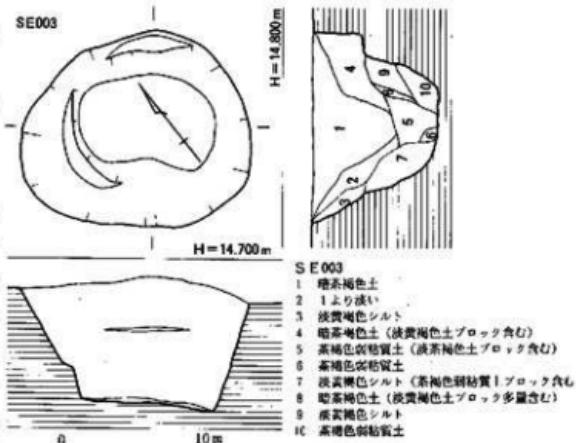
(2) 溝

SD 061-007の西側に位置する南北方向の溝で、両側で分岐する。幅は東側が0.25m、西側が0.5m前後で、深さは0.1mと浅い。覆土は暗灰褐色土1層で、断面観察からも重複関係は認められなかった。

出土遺物(第8図12) 復元口径15.6cmを測る土師器塊である。高台部を欠失し、底部にはヘラ切り痕を残す。やや丸味をおびた体部を呈し、口縁下の強いナデにより小さな玉縁状の口縁部を造り出す。色調は淡黄橙色で、精良な胎土に砂粒を混じえる。白磁碗II類を模倣したものと思われる。東側から出土した。他に土師器の細片が1点ある。

(3) 井戸

SE 003(第9図) 調査区の東側に位置する素掘りの井戸である。やや不整な橢円形を呈し、上面は長径1.55m、短径1.3m、床面は長径0.9m、短径0.55m、深さは0.85mを測る。西側及び北東側に平坦面を有する。断面は逆梯形である。出土遺物は大半が細片で、土師器、瓦器、陶器、白磁等がある。



第9図 SE 003実測図 (1/40)

4. B区・C区・D区の調査

1) 概要

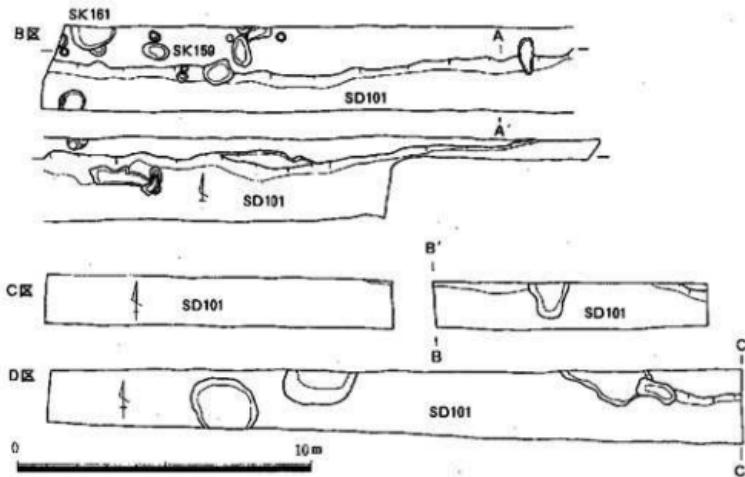
B区・C区・D区は既存道路（第8次調査地）を隔て、A-2区の西側に位置する。それぞれの調査面積は88.1m²、34.1m²、50.0m²で、検出した遺構は土坑、溝、ピットである。調査区の大半を、各区を東西方向に縦断する溝（SD101）が占有しているため、ここではB区・C区・D区を取りまとめて報告する。遺構面の標高は14.3m前後を測る。

2) 遺構と遺物

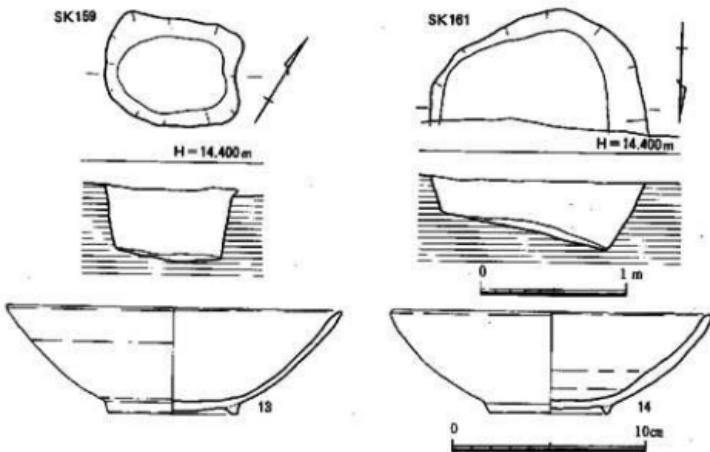
(1) 土坑

SK159（第11図） B区の西側に位置し、SD101を切る。やや不整な隅丸方形を呈し、長さ0.9m、幅0.75m、深さ0.5mを測る。検出当初は重複関係に気づかず、SD101を20cm程掘り下げた時点で、前後関係と南側の遺構プランを確認した。床面は平坦で、壁面の立ち上がりは急である。覆土は暗茶褐色土を主体とする。

出土遺物（第11図53・54） 共に瓦器塊である。53は復元口径17.0cm、器高5.5cmを測る。断面が三角形に近い低い高台を有する。やや丸味をもつ体部から口縁部へと延び、端部は薄く収める。調整は高台部の接合部付近をヨコナデするが、他は器面が磨滅しており不明。外面は黒灰色、内面は淡灰色を呈する。54は復元口径16.3cm、器高5.3cmを測る。53と形態は類似するが、器壁は厚手で、口縁端部を丸く収める。内外面ともに磨滅が著しい。色調は口縁部内外が黒灰色で、他の外面は灰色、内面は灰白色を呈する。他に土師器、同安窯系青磁等が少量出土した。



第10図 B区・C区・D区遺構配置図 (1/200)



第11図 B区土坑尖測図(1/40) 及び出土遺物実測図(1/3)

SK161(第11図) B区西端に位置し、北側は調査区外に延びる。幅1.5m、深さ0.45mを測り、床面は西側に傾斜する。覆土は暗茶褐色土を主体とする。出土遺物には土師器、白磁等の細片がある。

(2) 溝

SD101(第12図) B区・C区・D区で検出した主軸方位をN-87°-Eによる東西方向の溝である。この溝は第5次・7次・8次・11次・13次調査で確認されている南北方向の中世大溝に直交するものと考えられる。B区では北側肩部を略確認できたが、C区・D区においてはその一部を検出したにとどまる。南側肩部はいずれの調査区においても未検出で、調査区南側の既存道路(主要地方道大野城・二丈線)下に位置するものと思われる。断面は逆梯形で、幅は3m以上と推定される。深さは35cm前後で、東側に緩く傾斜する。土層の観察結果について述べると、まず第12図1はB区の中央部での土層断面図で、1層の暗茶褐色土は溝の掘り変えを示すものと考えられる。第12図2はC区中央東寄りにおいて、表土除去後の床土下の土層断面図で、北側の立ち上がりが一部観察された。6~12層が溝の覆土で、5層は第12図3の5層に該当し、北側肩部を削平する。第12図3はD区東壁の土層断面図で、北側の肩部が認められた。6~8層が溝の覆土である。5層は上述したように肩部を一部削平する。

出土遺物(第13図~18図) 土師器、瓦器、輸入陶磁器、滑石製品等が多量に出土した。B区での出土量が最も多く、C区・D区では比較的少ない。

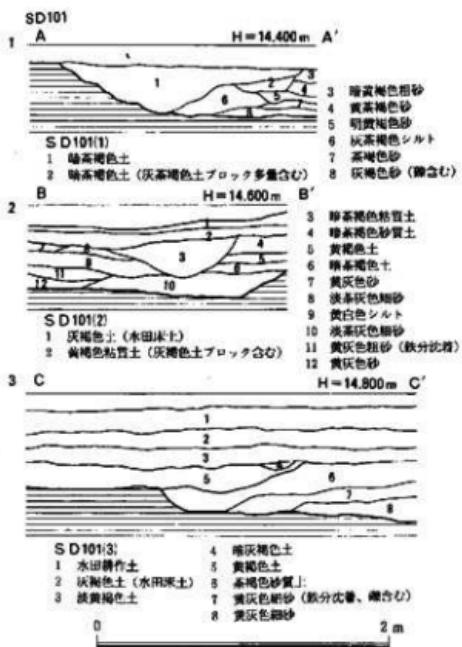
土師器

小皿（15～20） 18がヘラ切り底で、他は回転糸切り底である。19を除いては板状圧痕が認められる。順に口径は順に9.0、8.8、8.4、8.0、8.8、8.6cmを測り、平均値は8.6cmである。器高は1.2、1.1、1.1、1.1、1.0、1.5cmを測り、平均値は1.17cmである。調整は体部内外はヨコナデ、内底部はナデを施す。色調は18が淡橙色を呈するが、他は淡黄橙色である。

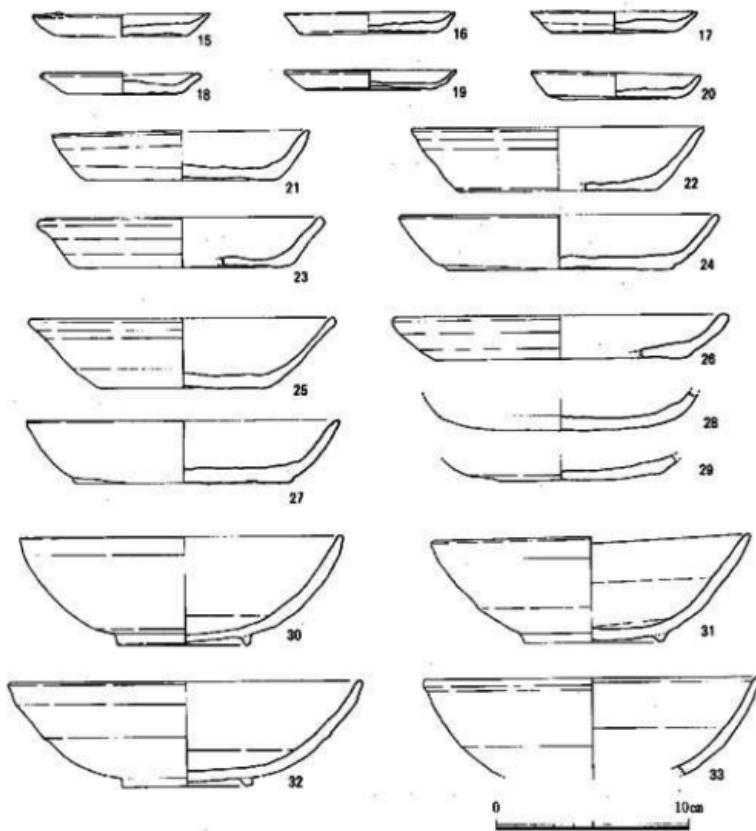
壺（21～29） 全て回転糸切り底で、法量により3つに分類できる。まず口径14cm以下で、器高3cm以下のもの（21・23）で、21は復元口径13.0cm、器高2.6cmを測り、板状圧痕が認められる。内外面磨滅する。23は復元口径14.0cm、器高2.6cmを測る。板状圧痕の有無は磨滅のため不明。次に口径15cm前後で、器高が3cm以上のもの（22・25・27）で、22は復元口径14.8cm、器高3.3cmで、板状圧痕は認められない。25は復元口径15.2cm、器高3.6cmで、板状圧痕が有る。27は復元口径15.8cm、器高3.2cmを測り、板状圧痕の有無は磨滅のため不明。24・26は口径が16cm以上で、器高は3cm以下である。24は復元口径16.2cm、器高2.8cmで、板状圧痕を有する。26は復元口径17.0cm、器高2.2cmで板状圧痕は認められない。28・29は口縁部を欠失する。外底部には板状圧痕を有する。

瓦器

壺（30～33） 30は復元口径16.2cm、器高5.5cmを測る。断面台形の低い高台部から、丸味をおびた体部をもつ。口縁下に肩部をもち、緩く短く外反する口縁部へと続く。外底部には「×」印の線刻が見られる。内外面ともに磨滅が著しい。口縁部外面は淡黒色、その外の部位は灰白色を呈する。31は復元口径16.0cm、器高5.5cmを測る。断面三角形に近い低い高台部から、やや丸味をもつ体部へと続き、口縁部へと延びる。外面の体部下半に不鮮明ながら指頭圧痕が認められる。口縁端部にはヨコナデを施すが、他は磨滅により不明。色調は淡黒色を呈するが、内面上位及び口縁部外面の一部は淡灰白色を呈す。32は復元口径17.8cm、器高5.4cmで、高台部は断面方形を呈す。体部は外方に開き気味に内湾し、口縁部下で屈曲する。内外面ともに磨滅



第12図 SD 101 上断面実測図 (1/40)

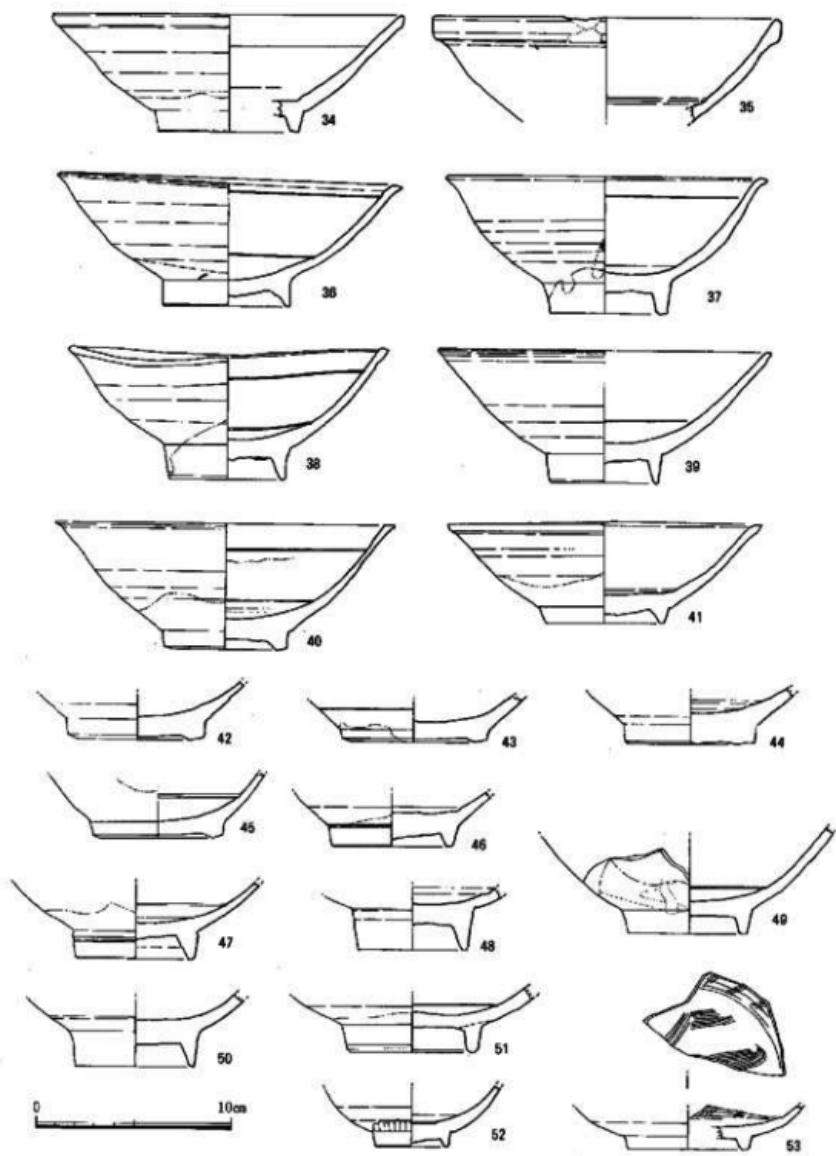


第13図 SD101出土遺物実測図1 (1/3)

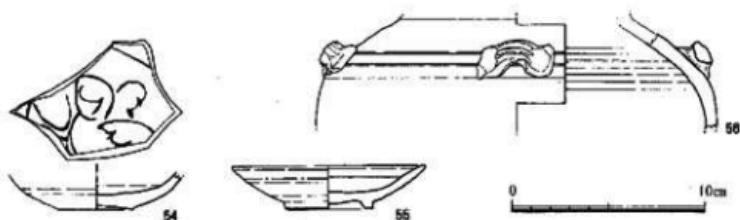
が著しい。口縁部内外には黒色、他は灰色を呈する。33は復元口径17.0cmを測る。口縁部は僅かに肥厚し、体部中位には屈曲が認められる。内面には鉄分が付着する。

白 磁

碗(34~53) 34・35は口縁部を玉縁状にするもので、校倉のそれは大きく厚い。34は高台外表面を直に割り出す。青味をおびた白色の釉がかけられるが、外表面下部及び内底部見込みの段部は露胎となる。35は内底部見込みに沈線状の段を有する。灰白色の釉が外表面下部を



第14图 SD101出土遗物实测图2 (1/3)



第15図 SD101出「遺物大測図3 (1/3)

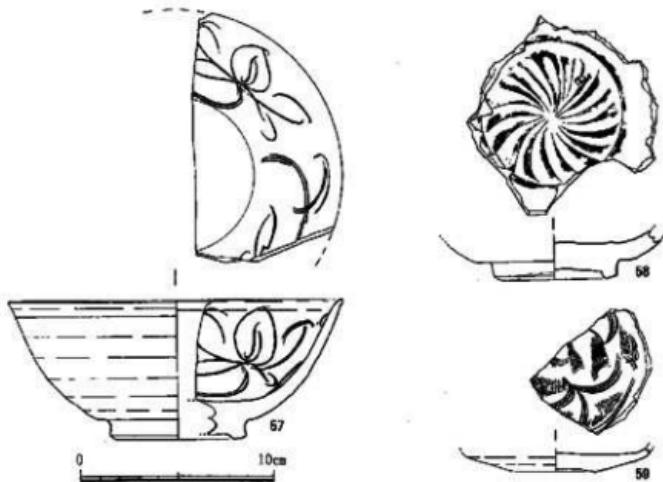
除いて施釉される。36~39は細く高い高台部を有するものである。36~39は口縁部を外反させ、端部を水平にする。38の口縁部外面は肥厚する。36~38は体部内面及び内底部見込みに沈線を有するが、37は不明瞭である。39は内底部見込みのみに沈線が見られる。釉色は36・37がオリーブ灰色、38・39が灰白色である。40は口縁部形態は36~39に類似するが、高台部の削り出しが浅く、底部の器肉も厚い。体部内面及び内底部見込みに沈線を有する。釉色は灰白色で、外面の体部下半は露胎である。41は低い高台から直線的に開く低い体部を有し、口縁部には小さい玉縁を持つ。内底部見込みには段状の沈線を有する。体部外面下半には施釉されない。釉色はオリーブ灰色である。42~52は底部片で、42~45は幅広で、削り出しが浅く高台部を有する。43を除いて内底部見込みに沈線状の段を有する。釉色は42~44が明オリーブ灰色、45が灰白色で、体部外面下半は露胎である。一部高台部脇まで釉垂れする。46は内底部見込みに段を行し、その内側の釉を輪状にカキ取る。釉色は明灰白色である。47~51は細く高い高台部を有し、内底部見込みに沈線を有する。釉色は48が灰白色、他は明オリーブ灰色を呈する。52は小碗で、内底部見込みに段を有する。灰白色的釉が体部と高台部の境付近まで施される。

皿 (53~55) 53は断面台形の低い高台部を有し、外方に開く体部の中位で屈曲する。内底部見込みに幅広の沈線を有し、櫛描文が施される。灰白色的釉が体部と高台部の境付近まで施釉される。54は体部上位で緩く屈曲し、その内面に沈線状の段を有する。見込みには草花文様が施される。釉は灰白色で、外底部は削り取られ、露胎となる。55は低い高台部からやや内湾気味に開く体部を有する。体部内面に細い沈線を持つ。内底部見込みの釉は輪状にカキ取る。外面の中位下半は露胎で、釉色はやや青味を帯びた灰白色である。

四耳壺 (56) 破片資料からの復元である。胎土は灰白色で、釉はオリーブ灰色を呈する。

龍泉窯系青磁

碗 (57・58) 共に高台部は断面方形で、疊付き部及びその内面は露胎である。57は内面に草花文を片彫りする。釉は淡緑色を呈する。58は内底部見込みに片彫りの花文が施される。くすんだ緑色の釉が厚く施釉される。



第16図 SD101出土遺物実測図4 (1/3)

皿(59) 体部中位で屈曲するが、その上部を欠失する。内底部見込みに櫛描きによる花文が施される。釉は淡緑青色を呈する。

同安窯系青磁

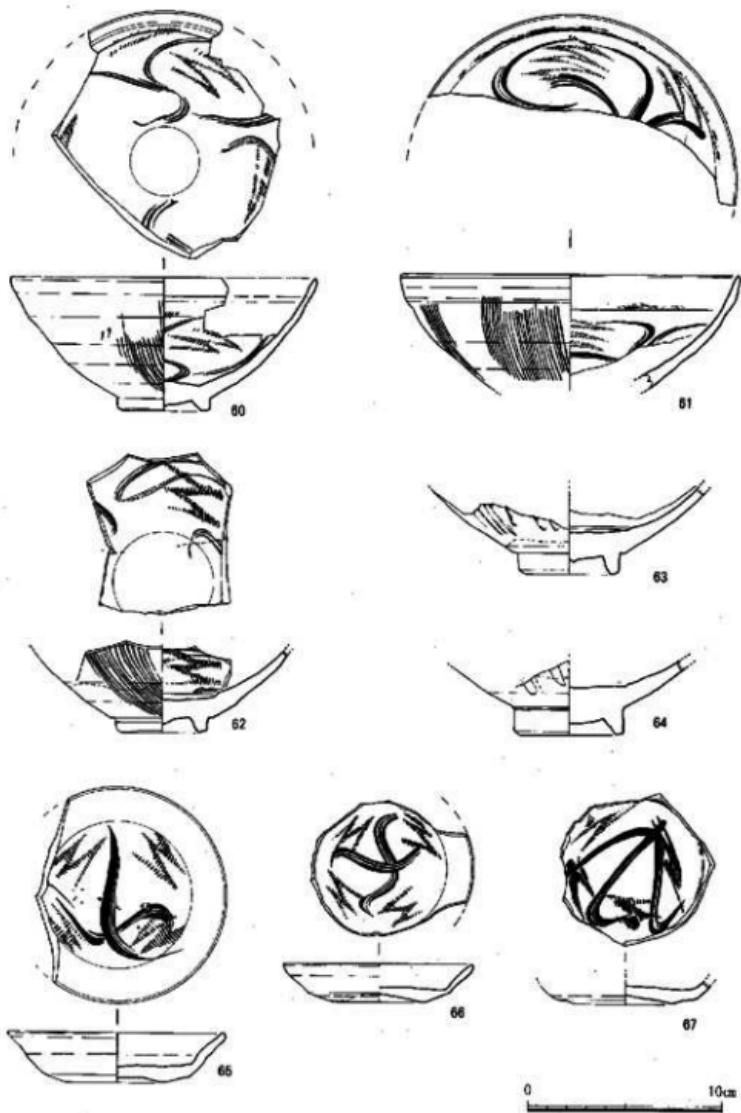
碗(60~64) 60~62は外面に細かい櫛目を有し、内面にはヘラ及び櫛描きによる施文がなされる。内面上位には沈線を持ち、内底部見込みに段を有する。体部外面下半には施釉されない。63・64は外面に片影りの沈線を有し、内面は無文である。内底部見込みに段を持つ。体部外面下半は露胎である。釉色は60・61・63は黄味がかった緑色、62・64はオリーブ灰色である。

皿(65~67) 体部の下位で屈曲し、外反気味の口縁部へと続く。内底部見込みにはヘラ及び櫛描きによる施文を有する。65・67は外底部の釉をカキ取る。66は体部外面には施釉されない。いずれも釉色は緑灰色を呈する。

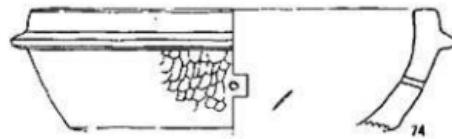
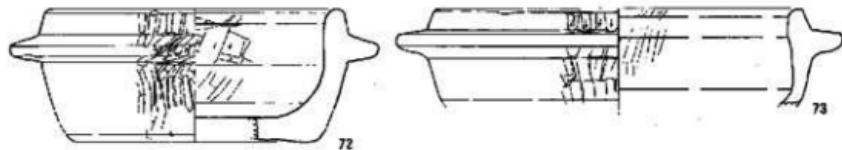
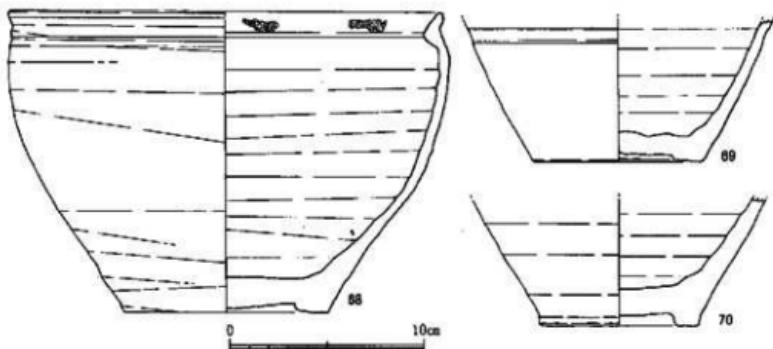
陶器

鉢(68) 最大径を体部上位に有し、内傾する口縁部をなす。口縁下には沈線が巡る。口縁部内面に目跡を残す。内底部見込み、疊付き及びその内部は露胎である。胎土は淡赤橙色で黒色の砂粒を含み、オリーブ灰色の釉が施される。

壺(69・70) 幅広の低い高台部を有する。69は内面、疊付き及びその内部は露胎である。淡オリーブの釉が薄く施釉される。70は疊付き及びその内部には施釉されない。釉色はオリー



第17図 SD101出土遺物実測図 5 (1/3)



第18図 SD101出土遺物実測図6 (68~70は1/3、他は1/4)

ブ色である。共に胎土は68に類似する。

土鍋（71）復元口径32.8cm、器高12.7cmを測る。比較的率りの良い丸味をもつ底部で、逆L字状の厚い口縁部を有する。内外面ともに刷毛目をナデ消す。

滑石製石鍋（72～75）内溝する体部を有し、口縁下に断面台形の鋸を持つ。鋸下には炭化物の付着が認められる。72・73はそれぞれ復元口径19.4cm・25.0cmを測る。外面にはノミによる削り、内面は削痕を研磨する。74は復元口径27.4cmで、鋸下には削痕が認められるが、鋸より上位及び内面は丁寧な研磨が施される。体部中位には径5mmの円形の孔が穿たれる。75は復元口径22.6cmで、鋸に削痕が認められるが、内外面研磨がなされる。

5. 上区の調査

1) 概要

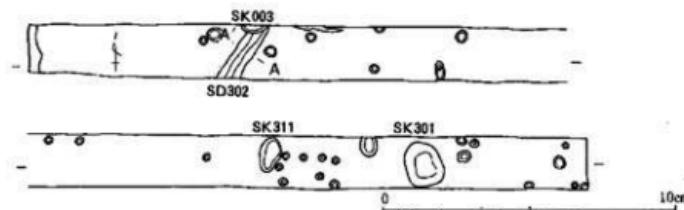
E区は今回調査地の南西端に位置し、既存道路（主要地方道大野城二丈線）を隔てC区・D区の南に対面する。調査面積は64.1m²である。検出遺構は上坑、溝、ピットで、遺構の密度は薄い。遺構面の標高は14.6mを測る。なお、本調査区の西南及び西側で第9・10次調査が行なわれているが、同様に遺構の広がりは散漫である。

2) 遺構と遺物

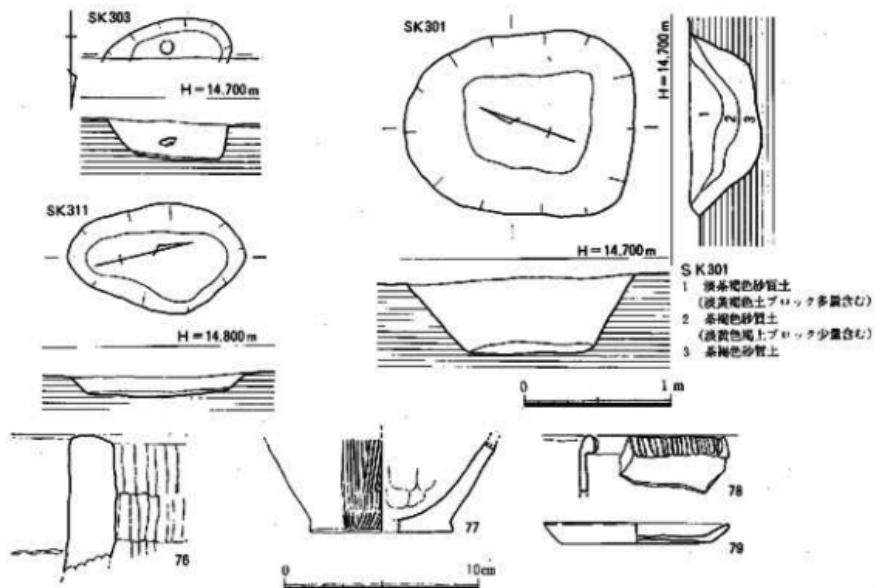
(1) 土坑

SK301（第20図）調査区の東側に位置する。やや不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.5mを測る。床面は略平坦で、隅丸方形をなす。

出土遺物（第20図76～78）76は滑石製石鍋の口縁部片で、外面にはノミによる削痕が残る。口縁部上端及び内面は研磨される。77は弥生土器底の底部で、復元底径は7.2cmを測る。底部端部は外方に張り出す。外面には縦方向の刷毛目、内面は指頭圧後、ナデである。胎土には砂粒を多量に含む。色調は外面が淡赤褐色、内面は淡黒褐色を呈する。78は刻目突蒂文土器で、口縁端に断面蒲鉾状の突帯が貼り付けられ、棒状工具による刻みが施される。内外面ともにナデである。色調は外面が淡褐色、内面がにぼい黄橙色を呈する。他に土師器、瓦器、白磁等の細片が少量出土した。



第19図 E区遺構配図 (1/200)



第20図 E区土坑実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)

SK303 (第20図) 調査区の西側に位置し、SD302を切る。北側は調査区外に延びる。既存で幅0.9m、深さ0.25mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土である。

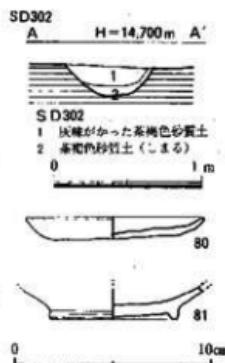
出土遺物 (第20図79) 土器器小皿である。口径9.2cm、器高1.1cmを測る。回転糸切り底で、板状圧痕を有する。体部内外はヨコナデ、内底部はナデを施す。胎上には金雲母片を含む。完形品で、覆土中位より出土した。他に出土遺物は無い。

SK311 (第20図) 調査区の東側に位置する不整な楕円形の土坑である。長径1.2m、短径0.75m、深さ0.15mを測る。覆土は暗茶褐色土である。土器器の細片が少量出土したにとどまる。

(2) 溝

SD302 (第21図) 調査区の西側に位置する南西-北東方向の溝である。SK303に切られる。幅0.65m、深さ0.15mを測る。

出土遺物 (第21図80・81) 80は土器器小皿である。口径8.9cm、器高1.2cmを測る。回転糸切り底で、板状圧痕が認められる。内外



第21図 SD302上層
断面図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)

面共に磨滅するが、体部内面ではヨコナデ、内面にはナデが不明瞭ながら残る。覆土中位で出土した。81は瓦器塊の底部片で、復元底径6.4cmを測る。断面台形の低い高台部を有する。内外面共に器面の磨滅が著しい。色調は外面が淡黒褐色、内面が灰白色を呈する。覆土上位で出土した。他に糸切り底の土師器小皿・杯、瓦器、白磁の細片が出土した。

6. F-1区の調査

1) 概 要

F-1区は今回調査地の南東端に位置し、既存道路（主要地方道大野城二丈線）を隔て、A-2区の南に面する。調査面積は93.7m²である。検出遺構は土坑、溝、ピットで、調査区西側に土坑・溝が集中して見られた他は遺構の密度は薄く、出土遺物の少ない。遺構面の標高は14.7mである。

2) 遺構と遺物

(1) 土 坑

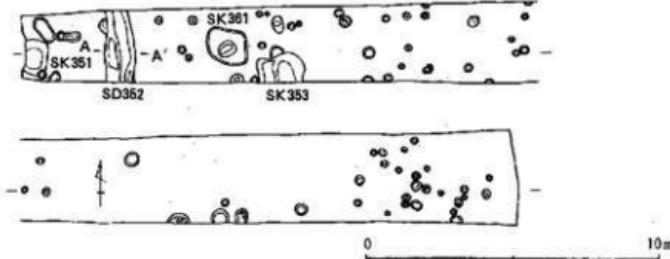
SK351（第23図） 調査区の西端に位置し、西側は調査区外に延びる。不整な楕円形を呈し、長径1.25m、深さ0.3mを測る。出土遺物には土師器、須恵質土器の細片が少量ある。

SK353（第23図） 調査区の西側に位置し、南側は調査区外に延びる。幅1.6m、深さ0.3mを測る。西側には平坦面を有する。出土遺物には土師器、白磁、青磁が少量あるが、いずれも細片のみである。

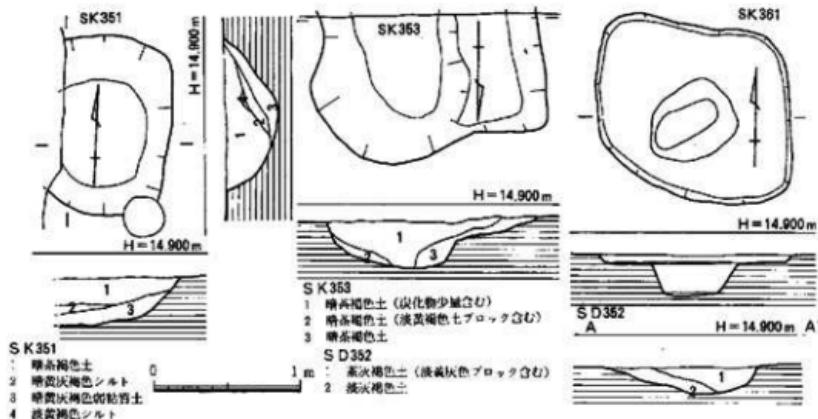
SK361（第23図） SK353の西に位置する。やや不整な円丸方形を呈し、長さ1.3m、幅1.2mを測る。浅い平坦面の略中央部に、深さ0.2mの楕円形のピット状の掘り込みを有する。覆土は暗茶褐色土で、炭化物を少量含む。土師器、瓦器の細片が数点出土した。

(2) 溝

SD352（第23図） SK361の西に位置する南北方向の溝である。幅0.8～1.05m、深さ0.2mを測る。北面するA-2区にはその延長と考えられる遺構は確認できない。出土遺物には土師器、白磁の細片が少量ある。



第22図 F-1区遺構配置図 (1/200)



第23図 F-1区土坑・溝土層断面実測図 (1/40)

7. F-2区の調査

1) 概要

F-2区はF-1区の西側に位置し、A-2区の南に対面する。調査面積は44.5m²である。検出した遺構は土坑、溝、ピットでF-1区と同様に遺構密度は薄く、出土遺物も少量である。遺構面の標高は14.7mを測る。

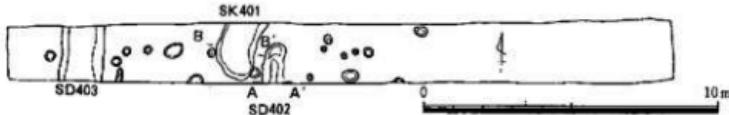
2) 遺構と遺物

(1) 土坑

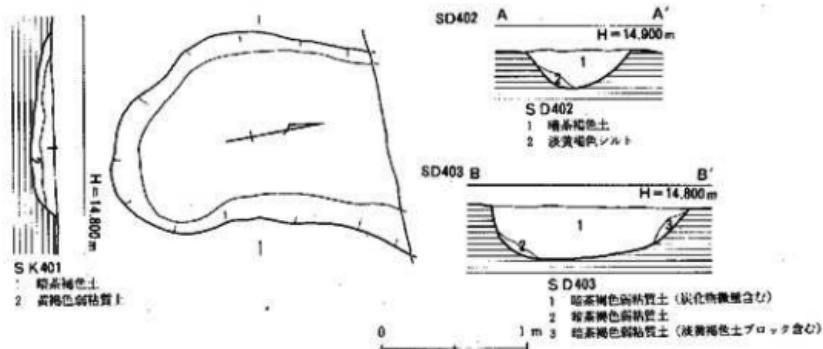
S K401(第25図) 調査区に西側に位置し、北側は調査区外に延びる。現存で長さ1.9m、幅1.2m、深さ0.2mを測る。底面は浅皿状を呈する。出土遺物には土師器小皿等が少量あるが、いずれも細片である。

(2) 溝

S D402(第25図) S K401の東に位置する南北方向の小規模な溝である。南側は調査区外に延び、北端には平坦面を有する。幅0.7m、深さ0.25mを測る。土師器、青磁の細片が少量出土したにとどまる。



第24図 F-2区遺構配置図 (1/200)



第25図 F-2区土坑・溝土層断面実測図 (1/40)

SD403 (第25図) 調査区の西端に位置する南北方向の溝である。幅1.4m、深さ0.35mを測り、断面は逆梯形を呈する。北面するA-2区にはその延長の構造は確認し得ない。また、検山当初は本調査区の南北で確認されている大溝（第5次調査SD100、第8次調査SD001）の延長部分とも考えたが、規模に大きな隔たりがある。出土遺物は糸切り底の土師器、青磁の細片が少量である。

IV. 結語

今回の調査では12世紀から13世紀代の遺構を中心に確認した。本調査地の南40mで実施された第5次調査において確認された大規模な集落跡と時期を略同じくし、検出遺構も柱穴、井戸、土坑等と構成要素も類似するが、その密度は希薄である。調査区が狭長で面的な広がりを把握できなかったため判断はできないが、同集落内でも縁辺部に該当するものと考えられる。

ここではB区・C区・D区で検出したSD101を中心におき若干のまとめを行いたい。右図(第26図)はB区・C区・D区及びその東西で実施された第7・8次調査の溝の配置を示したものである。「II. 遺跡の環境と概要」でも述べたが、該地周辺には1町四方に区画された条里地割が既存の施設に遺存しており、その道路上で検出された第8次調査のSD001は第5次調査で確認されたSD100の延長と考えられる南北方向の溝である。また、第7次調査のSD01はその1町西の南北方向に平行する溝である。今回の調査で検出されたSD101も条里地割の遺存である主要地方道大野城二丈線下で検出されたものである。各溝は出土遺物からみて略同時期の12世紀前半に開削され、その後半以降に埋没が始まっていることから東西方向のSD001は南北方向の両溝をつなぐものと考えられる。溝の性格についてはこれまでにも再三述べてこられている様にその一つに水路としての機能を付与することは異論のないところで、これは各溝の下層部には例外なく水性堆積物が観察されることからも首肯できよう。溝の規模を比較すると主体をなすのは南北方向で、SD101以外にも部分的に確認されている東西方向の溝はいずれも小規模である。SD101は東側に傾斜が認められること、またSD01とSD001の溝底面の標高の比較では西側のSD01が高位置にあることにより、SD101はSD01から取水したものと考えられる。



第26図 田村遺跡第12次調査周辺溝配置図
(1/600)

図 版



田村遺跡周辺航空写真

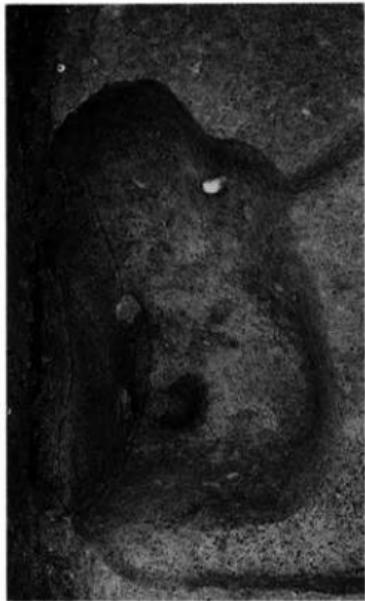
図版 2



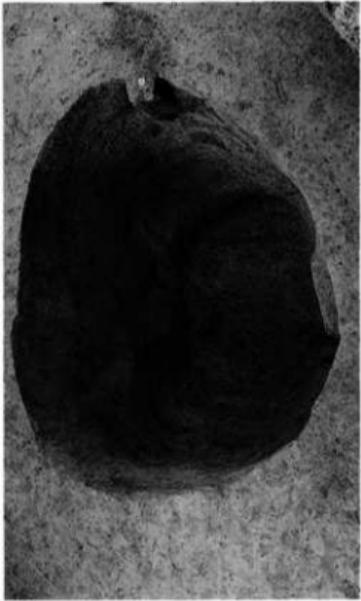
(1) A-1区全景(東から)



(2) A-2区全景(西から)



(2) A-2区SK002 (北から)



(4) A-2区SE003 (北東から)



(1) A-2区SK001 (東から)



(3) A-2区SD061 (南から)



(1) B区全景(東から)



(2) B区SD101土層(西から)



(3) B区SD101遺物出土状況(東から)



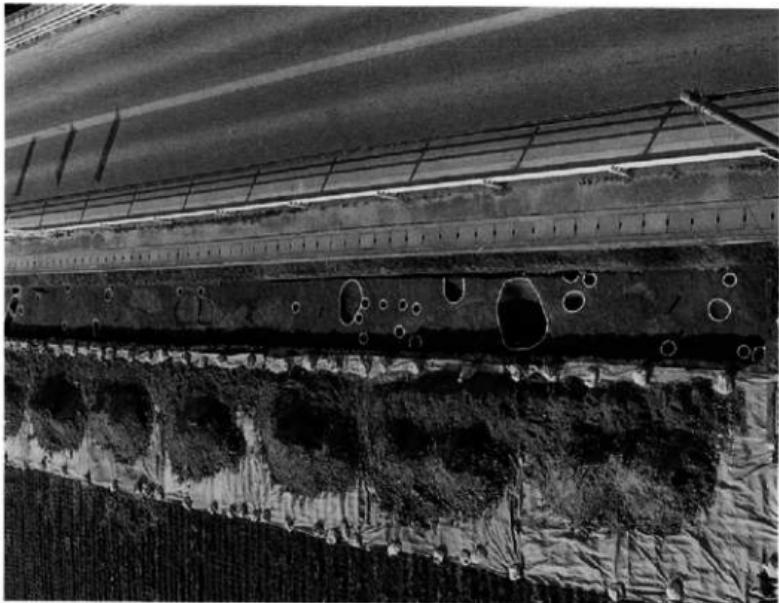
(1) D区 S D101 (西から)



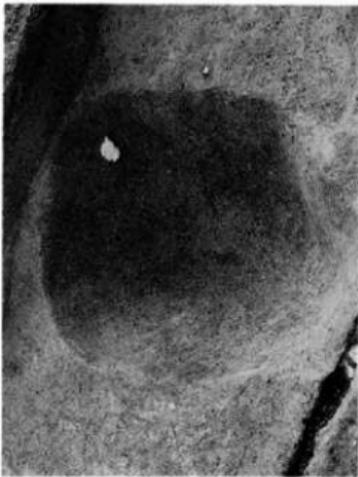
(2) C区 S D101土層 (東から)



(3) D区 東壁土層 (西から)



(1) E区全景(東から)



(2) E区SK301(北から)



(3) E区SD302(北東から)



(1) F-1・F-2区全景(東から)



(2) F-1区SK351(西から)



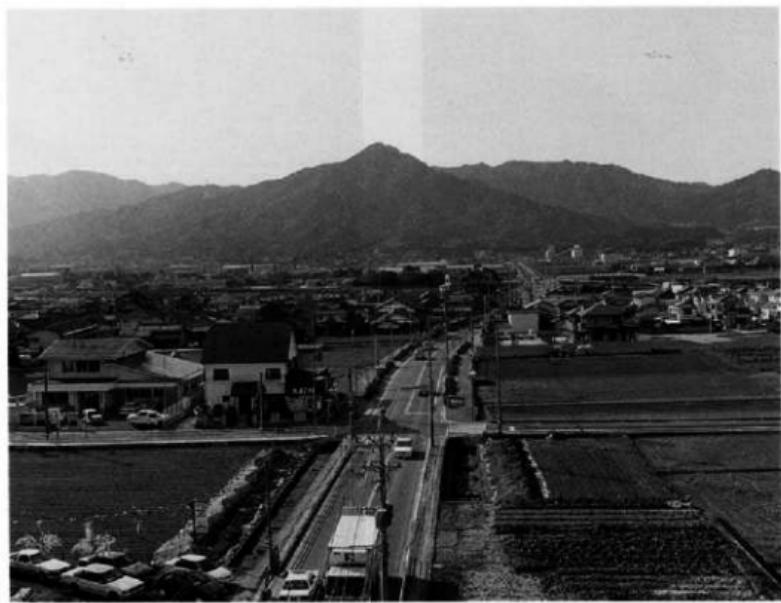
(3) F-1区SK353土層(北から)



(1) F - 2 区 S K401 (北から)

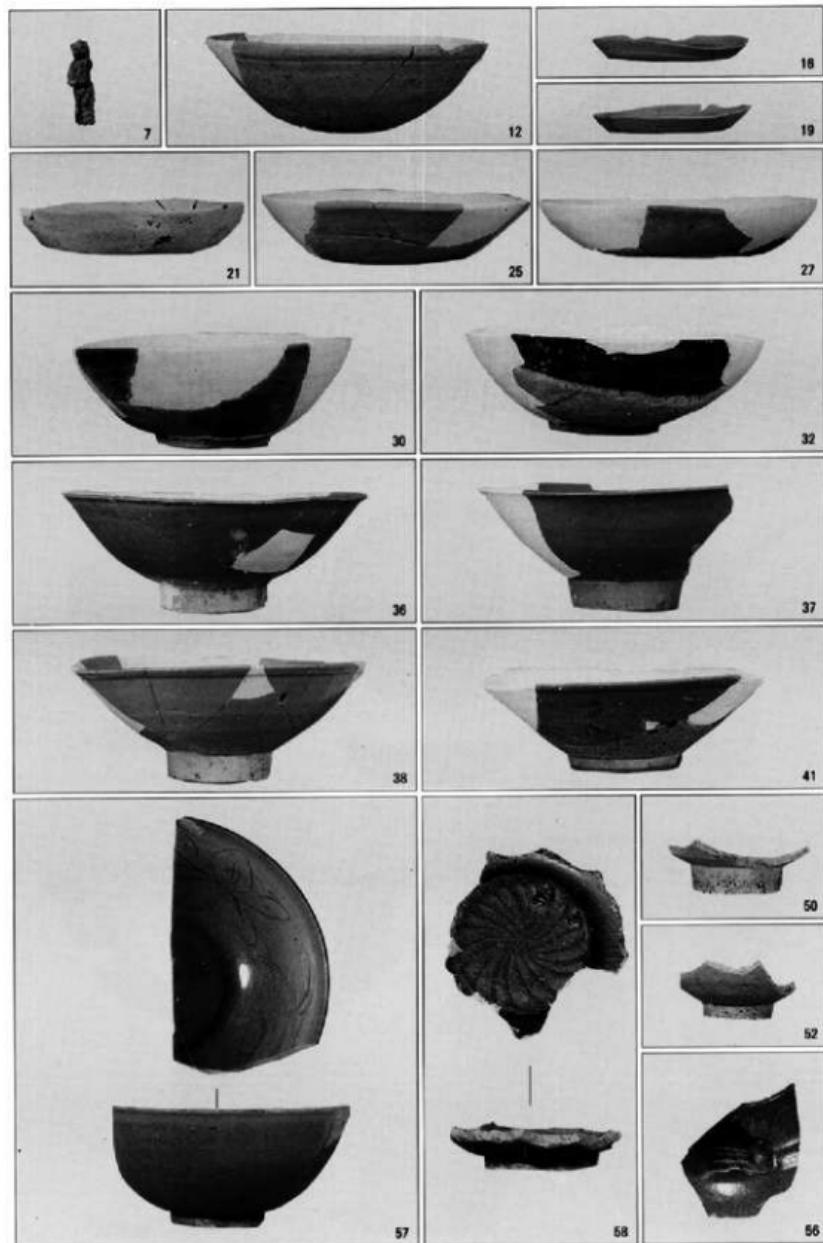


(2) F - 2 区 S D403 (南から)

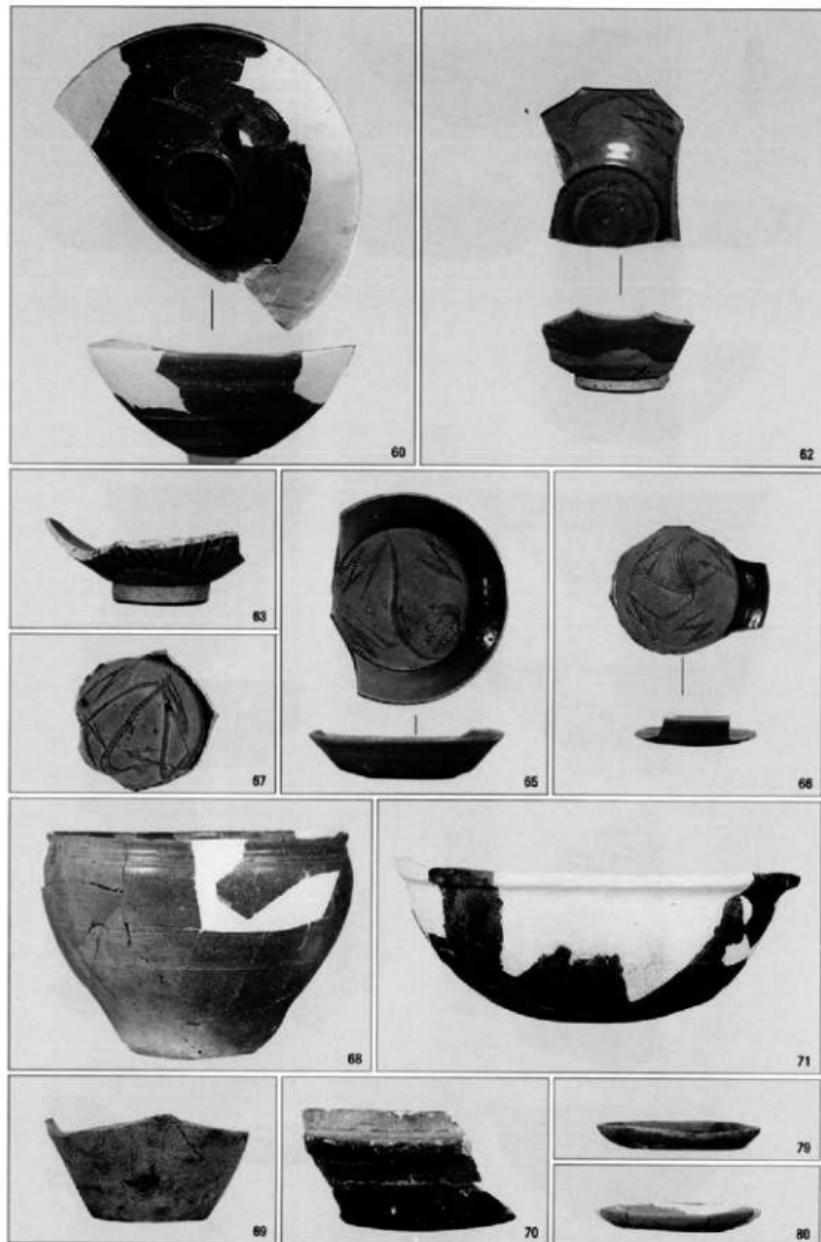


(3) 調査区周辺風景 (後方は飯盛山)

圖版 9



出土遺物 I



出土遺物 II

田村遺跡 X

－第12次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第385集

1994年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 倭松古堂印刷
